

なりとの事に候。競賣の光景は、場内表面に濃き海老茶色の天鷲絨の幕を垂れ、二人の男子左右より繪を高く差上げ、傍に立てるセリ人は、煽動的口調を以て聲高に糶直を呼び居候。

北米の寒氣は日にまし甚しく相成候。コンモンパークの池の氷は一夜に一尺五寸の厚さを増せしとて、スケートの遊び極めて盛んに、凸所を削りとるべく器械馬車の一巡し終るや、無数の老若男女は其跡に詰めかけ、氷の面も見えぬ程に御座候。見るからに心地よき少年の一隊彼方に縦横に走るもあれば、此方には初まなびの足どり危ふく、手を曳かれ肩に倚りて覺束なくも車を滑らすもあり、時にはハヅミに乗りて他に衝突せんとをおそれ大聲を發して警戒するもあり、肉肥ふたる婦人の美事に迂りて横ざまに倒るもありて、橋上に立ちて見物して居ると、殊に面白く歸るのも忘る、程に御座候。

宿の妻君とは日に懇意と相成候ものから、夕飯後の半時間はいつも雑談に暮し候。獨逸婦人なれば家政巧みに、種々内幕話もきいて益する處少なからず候。妻君の話に、此家は大小八室、其他食堂勝手元物置、ほかに十坪程の物干場つきにて家賃一箇月五十弗、石炭十五弗、水道二弗、瓦斯三弗、其他の費用を合せて凡そ八十弗を要するに、主人の給料は一週十弗なれば、不足は室を貸して補ふことにて、近來はトラストやストライキなどで物價高くして困るなど泣言を申居候。それ故部屋といふ部屋は不殘人に貸して、主人はパーラーのソファの上に、妻君と小兒は勝手元の一隅に寢臺を置いてそこに臥り居候。妻君は平

生は木綿の衣服を着てラララ／＼とうたひつゝよく働いて居候へ共、外出の時は指には光つたものも見え、見違へる程立派に相成申候。(January 20 1904)

西洋の言葉に(The Third Eye)と云ふ事がある、美術家は二つ以上の眼を持つてゐる——世間では彼は口の人だとか筆の人だとか腕の人だとか言ふ、美術家にも勿論腕も筆も口もいるだらう、けれども美術家に最も必要なるは此二つの目、雙眼以上の第三の眼である、即ち天眼である、靈眼である、神眼である、——眞の美術家といふものは或る意味に於ては大學者でなくてはならぬ、又大學者に非ずんば決して美術家の最も小なるものときへなることが出来ぬ、吾輩の言ふ大學者とは大に學ぶといふ事である、即ち人に學ぶんでなくて、天に學ぶ、神明に學ぶ、神明に導かれ、造化に師事して、今謂ふ所の靈眼或は靈腕を以て造化の眞意を窺ひ寫すの工風がなくてはならぬ、齋戒沐浴的精神を以て、其職を天職と思ひ、天命を奉ずるものと思ふ程の神靈的の修養、是は勉めて亦勉め、勵むで愈々勵まればならぬことであらうと思ふ。(和田垣謙三氏「美術と經濟」中央公論)